ノヴァーリスの自然観における習慣の意味

三宅中子

はじめに

以前この研究年報第十六輯において、パスカルの自然と習慣についての問題をとりあげた際に、パスカルの習慣についての考え方の中心になる、「パンセ」の中の断片は次のものであった。

「習慣は第二の自然であって第一の自然を破壊する。しかし自然とは何なのだろう。なぜ習慣は自然ではないのだろう。私は習慣が第二の自然であるように、この自然それ自身も第一の習慣（première coutume）にすぎないのではないかということを大いに恐れる。」[註1]

これはブランシュヴィック版の「パンセ」の断片九三の一部であるが、このパスカルの断片九三における習慣論の、「自然を第一の習慣である」とするところに、ドイツの哲学者のゲルハルト・フンケが彼の大著「習慣論」の中で、パスカルのユニークさを指摘していることも前稿において紹介した。しかしその際にフンケが次のようにのべているところには前稿ではふれずにおいた。

「習慣が再三再四、『第二の自然』として特色づけられる時、そのことをもっと深く考えて、自然それ自体を『第一の習慣』とみなしたとしてもそれは当然のことである。ノヴァーリスは、彼が非組織的に並列した一連の断[註2]

章をそのような見方（つまり自然を第一の習慣とするような見方）に導いた。ノヴァーリスは『心理学と物理学』について、次のようにのべている。『習慣は出来上って来たしくみ（Mechanismus）である。――自然になった人工（Kunst）である。自然法則（Naturgesetze）は習慣の法則（Gewohnheitsgesetze）である。習慣が出来上る（Gewohnheitentstehung）とは自然が出来上る（Naturentstehung）ことである。自然は習慣である。――そしてだから Kunst から出来上って来るものであり、くり返しによって生じて来るのである。――不器用な不完全な、非法則的なリズミカルでない自然。（ungeschickte, unvollkommene, ungesetzmäßige, unrhythmische Natur）』

だが、ノヴァーリスより以前にすでにパスカルによってこのような思考過程がさきに形づくられていた。」

フンケは以上のようにのべて「第一の習慣としての自然」と題するパスカルの項の説明に入って行って、ノヴァーリスについてはこの箇所でも、そしてその「習慣論」という著書の中でもそれ以上ふれていない。

しかしフンケのこの指摘は非常に興味ぶかい。第一にノヴァーリスのその引用の断片をみたところでは、パスカルと同じようなことを更にもっと徹底させて考えているし、第二にノヴァーリスを主にしてみると、パスカルにすでに同じような考え方がみられて、パスカルとノヴァーリスの間に何か脈絡がありそうである。

「自然は第一の習慣である」という考え方はたしかにパスカルの自然観及びその二元論を解明して行く上で一つのキイポイントになり得たし、この考え方自体、非常に示唆に富むものであった。だが、ノヴァーリスの独自な自然観の中で、このパスカルの断片九三を、もう少し発展させているようにみえる習慣論は、どのような意味をもつのであろうか。ドイツローマン派の思想の中でも最もユニークなノヴァーリスの思想の中にどんな形で根をおろしているのであろうか。

註1　学習院大学文学部研究年報第十六輯（昭和四十四年度）八頁以下、「パスカルにおける自然と習慣について」と題する論文においては「パンセ」の次のテキストを使用した。
Blaise Pascal: Pensées et opscules par M. Léon Brunschvicg 18 édition Hachette

註2　Archiv für Begriffsgeschichte B 3 Gewohnheit von Gerhart Funke, 2 Auflage 1961 Bouvier Verlag. Bonn. S. 253 f.

第一章　ノヴァーリスにおける自然の法則と習慣について

第一節　ノヴァーリスの習慣の問題への関心

本稿序文の習慣についてのノヴァーリスの記述は、パウル・クルックホーン及びリヒヤルト・サムエルによる全集の第三巻中の一般的草稿（das allgemeine Brouillon）の断片二九四の全文である。この内容は、いわゆるカムニッツェル版などでは、寸断されていて、ノヴァーリスのいわば習慣論としてまとまった印象にならないが、このクルックホーン版の断片二九四はこれだけで相当徹底した習慣論になっている。

ただそのほかにはどのような記述があるかということになると、これはパスカルほどにはひんぱんに論じられている様子はない。「人工（Kunst）はもともと習慣的なものである」とか、「習練によってマスターできる」というようなことはノヴァーリスの各種の作品にしばしば出て来るが、習慣についての比較的まとまったものは同じクルックホーン版「一般的草稿」中の断片三四七と三五二ぐらいである。

断片三四七[註1]では次のようなことがいわれている。

「心理学。あらゆる新しいものは外的なもの、疎遠なものとして詩的に影響を及ぼす。あらゆる古いものは内的

なもの、自己固有のものとして同様にロマンティッシュに影響を及ぼす。両方とも習慣的なもの（das Gewöhnliche）と対照をなしている。あるいは両者たがいに対照を成している。古いものの新しさ、新しいものの古さ。日常の生活（das gemeine Leben）は散文的であり、話（Rede）であって歌（Gesang）ではない。習慣的なものの集合は、習慣性のみを強化する。それ故日常的な（無頓着な）有用な散文的な観点から世の中の致命的な印象を受けることになる。」

又、断片三五二[註2]では、

「日常生活の理論・習慣的な日常生活の散文としての形づくられた表現と暗誦。歌えない時は、おしゃべりすることで楽しまねばならない。音楽的な楽器・詩的な楽器。（平凡な著想。表面的な著想）。」

この二つの断片では、習慣的なものの見方しか出来ないものは、生 Leben をただ平板にしかとらえることが出来ないこと、生の実相は、ごく一般的な、実生活に有用（ニュックリッヒ）であるかどうかだけに関心があって、生の実相云々には無関心なもの、習慣的なものの見方のかたまりになっているようなものには、世の中もいたってきまりきった形で映るだけであることがのべられている。この二つの断片は生の哲学者か実存主義者がいいそうなことで、ノヴァーリスあるいはロマンティークの複雑な性格をまのあたりにみるおもいであるが、ただだからといって、ノヴァーリスがいわゆる実存主義の詩人のように、習慣性や日常性をきらったとだけ受取ってしまうのは早計というものである。むしろここでは、習慣がものの見方に心理的に致命的な、決定的な影響を与えるといっている点を見落してはならないと思う。それは断片二九四の内容を思えばなおさらである。

そこで再び断片二九四であるが、もう一度ここに引用しなおしてみよう。

「心理学（Psychologie）と物理学（Physik）。習慣（Gewohnheit）は出来上って来たしくみ（Machanismus）

である。自然（Natur）になった人工（Kunst）である。自然法則（Naturgesetze）は習慣の法則（Gewohnheitsgesetze）である。習慣が出来上る（Gewohnheitentstehung）とは、自然が出来上る（Naturentstehung）ことである。自然は習慣である（Die Natur ist eine Gewohnheit.）。そしてだから（習慣は――筆者註）人工から出来上って来るものであり、くり返しによって生じて来るのである。――不器用な不完全な、非法則的なリズミカルでない自然。」

この断片は、ノヴァーリスが自然と人工を習慣との関係でのべた殆んど唯一のものである。ここには彼の自然観が集約されていて、非常に興味ぶかい。

先ず、この断片のタイトルが、心理学（psychologie）と物理学（physik）となっている点である。これはノヴァーリスの試みた百科全書学ともかかわるので、本稿の次のセクションで百科全書学に少し立ち入ってみようと思うが、綜合的な科学の建設をめざしたノヴァーリスは、物理学の法則が成立するプロセスには習慣のサイコロジーが反映されているというように考えたのではないだろうか。つまり物理学と心理学は習慣をなかだちにして接近するのである。このことについては、パスカルのパンセの中の習慣についての断片のうちの次のものを、このノヴァーリスの断片に対応させてみるとはっきりするのではないかと思う。

「我々の自然的原理というものは我々がそれに習慣づけられた原理でなくて何であろう……。異なる習慣は我々に異なる自然的原理を与えるのである。（断片九二）。」

ところで本論の序文でのべたように、ゲルハルト・フンケがこのノヴァーリスの断片二九四と対応させたパスカルの断片は断片九三である。

「習慣は第二の自然であって第一の自然を破壊する。しかし自然とは何なのだろう。なぜ習慣は自然でないのだ

ろう。私は習慣が第二の自然であるように、この自然それ自身も第一の習慣であるにすぎないのではないかということを大いにおそれる。」

これらノヴァーリスの二九四とパスカルの九三とを比べてみると、たしかに一方は他方をもうひとおしして徹底させたものだということが納得できる。つまり、ノヴァーリスの「習慣は自然になった人工である」というのはパスカルの「習慣は第二の自然である」というところにあたり、パスカルの「習慣が第二の自然であるように、この自然それ自体も第一の習慣であるにすぎないのではないか」というところをもうひとおしすると、ノヴァーリスの「自然は習慣である」というようになると考えられる。ただノヴァーリスには第一の自然、第二の自然という表現はないし、自然が習慣であることをパスカルのように「おそれて」いる様子もなく、遠慮なくズバリといいきっている。それは人間と自然及び神のとらえ方で両者に差があるからである。

一体ロマンティークは十八世紀の啓蒙主義（合理主義）への反動であるといわれるが、「政治的ロマンティーク」[註3]の著者カール・シュミットは、ロマンティークの精神的状況の説明はデカルトをもって始めなければならないという。「コギト・エルゴー・スムは人間を外界の現実ではなく主観的内面的過程へむかわせ、人間の自然科学的思考は地球中心的であることをやめて中心を地球の外に求め、哲学的思考は自己中心的となって中心を自己のうちに求めた。近代哲学は思考と存在、概念と現実、精神と自然、主観と客観の分裂に支配され、カントの先験的な解決もこの分裂を除きはしなかった。」そしてカント後の哲学者はこの分裂の克服にあたることになり、フィヒテが先頭をきった。ノヴァーリスは、フィヒテの主観的観念論に息吹きを与えた格好となった。そして又、合理主義の分析的な抽象的普遍性を代表するのは、デカルトであった。だが、デカルトと同様、機械論的自然観をとりながらも、「神に最初のひとはじきの役目だけを与えたずるいデカルト」という表現で、その理神論を批判し、理性が習慣の

あやつり人形であることに気づいたパスカルは、ロマンティークの反主知主義を先がけしていたわけである。だからその反デカルトという意味ではパスカルとロマンティークは同じ系譜のものであることになって、パスカルとノヴァーリスを結びつけることは特別唐突ではなさそうである。ただし、本稿の序文で引用した、ゲルハルト・フンケの文章では、ノヴァーリスがパスカルの習慣についての考え方を受けついで、そのまま発展させたかのような表現であるが、これはどうであろうか。ノヴァーリスの書きのこしたフラグメンテをあたってみても、とくにパスカルを研究したというような形跡はみあたらない。だが結果的にはノヴァーリスの断片二九四とパスカルの断片九三は内容的に親近性をもっているということはいえそうである。一体に哲学史の上からみて、反主知主義の系譜に属するものは習慣の問題に関心を払う傾向がある。とくにフランス哲学の場合はその傾向がいちぢるしい。一九世紀には一連の習慣論の哲学が出来上るが、パスカルの思想は内面的にはこれらと連関していることはたしかだが、そこにおいてパンセの断片九三の「自然は第一の習慣である」というような考え方がどのように受けとられたかというようなことになって来るとあまりはっきりしたことは出て来ないのではなかろうか。それよりむしろ十八世紀のドイツローマン派の土壌の中であまり目立たない形でではあるが、花開いていることは興味深い。しかしその花がどのような色合いのものかは、ノヴァーリスの断片二九四だけではよくわからない。そこでさしあたって自然法則というものをどのように考えたかをまとめるために、いわゆる自然科学（Naturwissenschaft）はノヴァーリスにとってどのように考えられたのかにあたってみたいと思う。

註1　Novalis Schriften, herausgegeben von Paul Kluckhorn und Richard Samuel Band 3, W. Kohlhammer Verlag Stuttgart 1968, S. 303.
以下この版の引用の際は Kluckhorn と記す。

註2　Ebenda, S. 303.

註3　Carl Schmidt: Politische Romantik, Verlag von Dunker & Humblot München und Leipzig, 1925, S. 77 f.
大久保和郎訳「政治的ロマン主義」みすず書房　六四頁以下。

第二節　自然科学との関係

ノヴァーリスの年譜をみていると、「一般的草稿（Das allgemeine Brouilllon）」と題した一群の覚え書きは一七九八年から稿をおこしたようであるが、これに先立つ一七九七年にザクセンのフライベルクの鉱山学校（Bergakademie）に入っている。ライプツィッヒやイェナの大学で法律の勉強をする一方で、ヘルダーリンやフィヒテなどと会ったり、フィヒテ研究のフラグメンテを記し始めたりしているかと思うと、ヴァイセンフェルスの製塩所の監督の下での見習いになっている。ヴァイセンフェルスには一七八五年に、彼の父がザクセン選帝侯所領の製塩所長になってから一家で移り住んでいる。

当時フライベルクの鉱山学校はヨーロッパきっての理工科系の名門で、自然科学研究熱にとりつかれたノヴァーリスもここで学ぶことになった。そもそも鉱山冶金学[註1]はヨーロッパの中世から近世に移り行く時期にあって非常に重要な意味をもつ。例えばザクセン生れのアグリコラの、「デ・レ・メタリカ」は、十六世紀の鉱山冶金術の集大成書であると共に、新しい科学と技術への道を示唆し、近代技術の夜明けをつげる画期的な技術書であった。ゲーテも色彩論の中でその業績の偉大さをたたえているぐらいであるが、近世の三大技術といわれる火薬（大砲と小銃）、遠洋航海術、活字印刷術のうち、大砲の製造と活字の鋳造とが鉱山業を促進する有力な原因の一つになったことが鉱山冶金学の発展をも促したのである。

それで、銀山のあるフライベルク[註2]も十六世紀が最盛期であったが、ザクセン侯領の財政的な窮状、とくに七年戦

争後の財政的破綻の救済策としてフライベルクにベルクアカデミーが設立されることになった。この学校で優秀な技術者を養成して鉱山技術を向上させて生産能率をあげるためである。それは一七六五年のことであるが、このもくろみはあたって、早くも九〇年代の始めにはフライベルクの銀の採掘量は増し、ザクセン全体の鉱山産出額もみるみるのびて行った。同時にベルクアカデミーの方も発展し、教授陣には当時のヨーロッパの著名な学者がきら星の如く並び、生徒もドイツの他の各州からはいうに及ばず、ヨーロッパの全域から集った。教授達の中で最も重要な人物はアブラハム・ゴットロープ・ヴェルナーで、この人のベルクアカデミーと鉱山業全体につくした功績ははかりしれないものがあった。ノヴァーリスは「青い花（Heinrich von Ofterdingen）」の中で老坑夫の口をかりてその間の様子をつたえている。

「私[註3]は主人のことを考えるといつも涙がこぼれるのです。主人は神の心にかなったむかしの世界から来た人間でした。ふかい見識をそなえていましたが、しかしその行状は無邪気で、謙遜でした。あの人によって鉱山業は全盛に達し、そのためにベーメンの君侯（実際はザクセン侯――筆者註）は莫大な財宝をうることになりました。そのおかげでこの地方全体が、人口も増加してゆたかになり、繁栄しました。すべての坑夫はあの人を父としてあがめました。そしてオイラの地のあるかぎりその名は感激と感謝の念をもって呼ばれるでしょう。主人は生れからいうとラウジッツの人で、ヴェルナーという名でした。」

かくしてノヴァーリスは当時としてはトップレベルの環境で自然科学に親しむことになったが、とくにヴェルナーからはいろいろな影響を受けた。ヴェルナーは地質学者で、岩石の起源について水成説をとり、彼の学説は十八世紀における地質学上の大きな収穫になった。ヴェルナー[註4]の「鉱山学の百科全書（eine Enzyklopädie der Bergwerkskunde）」の講義の中で、ノヴァーリスはとくにその分類法（die Klassifikationsmethode）に興味をもち、

これをあらゆる学問の領域に拡大することを思いつき、ゲーテの「諸学問の取扱い（Behandlung der Wissenschaften）」を参考にして、自ら百科全書学（Enzyklopädistik）を企画した。百科全書といえば我々はすぐにフランスのディドロが中心になって編さんした例の Encyclopédie の方をさきにおもい浮べるが、これは丁度ノヴァーリスの生まれた一七七二年に完成している。このアンシクロペディーのダランベールの序言をノヴァーリスは一般的草稿（Das allgemeine Brouillon）の中にも書きこんでいる。（断片三六六）このダランベールの序言の中でも、「体系的な精神は、還元の精神であり、単純化の精神である（L'esprit systématique est L'esprit de Réduction ou de Simplification）」というくだりはそのままノヴァーリスの百科全書学建設の精神ともなっている。この百科全書学の完成をめざして記して行った覚え書きが、「一般的草稿」という形でのこされた一群のフラグメンテである。

フラグメンテといえばシュレーゲルなどは体系化をきらってこのんで断片形式によってその思想を表現したようであるが、ノヴァーリスの場合、将来の百科全書学の形成の目的は彼の二十九歳での早世のためにみのることなく、ただ覚え書きの羅列におわってしまったということなのであって、この点パスカルのいわゆる「パンセ」が断片集であることも全く同じような事情のものであった。（パスカルはキリスト教弁証論をまとめることを考えながらこれもやはり早世のため果せず、断片のままのこされていたものが「パンセ」になった。）

ところで彼の意図した百科全書学はどんなものであったのだろうか。[註6]その根本の考え方は、「あらゆる学問は一つである（Alle Wissenschaft ist eine）」ということになるが、つまり、各専門分野に分岐してしまった学問を再び結合せしめる、学問的な、よりふかい精神を求めることであり、断片二三三[註7]によれば、諸学の比較、類似性、同一性及び作用（Verhältnisse, Ähnlichkeiten, Gleichheiten und Wirkungen der Wissenschaften）を順次に探し

出すことであった。

断片[註8]三一三では次のようにいう。

「物理学。各々の部分は自然の中で一つの機能を果しているのであるから、各々の個々の部分の科学は又自然科学全体の一つの機能を果すのでなければならない。」

例えば物理学なら物理学においては、これまでは現象は連関から切りはなされるだけで、その関係において現象を追及することをしていない、といってノヴァーリスは従来の物理学のあり方を批判する。各々の現象は鎖の一つの輪なのであって、自然全体は連鎖的にとらえられねばならないというのである。

以上のような百科全書学のもくろみの中で、はじめからしばしば問題にしている断片二九四の中の、自然法則は習慣の法則である（Naturgesetze sind Gewohnheitgesetze）とはどのような意味内容であろうか。自然の法則についてノヴァーリスは又、かなり思い切ったことをいっている。

「自然[註9]はつねにこれまで法則的であったのであろうか、あるいはこれからもずっと法則的なものでありつづけるのであろうか。」

「自然[註10]の不変の法則（die unabänderliche Gesetze der Natur）は錯覚（Täuschung）ではないだろうか。それは最高度に不自然なことではないであろうか。あらゆるものは法則にしたがって動き、そして何ものも法則にしたがわない。法則は単純な、容易に概観しうる関係である。我々は便宜上から法則を求める。自然は一定の意志を持っているのであろうか、あるいは持っていないのであろうか。私は両方を信じる。自然はあらゆるものに対してすべてである。」

パスカルは「習慣が第二の自然であるように、この自然それ自身も第一の習慣であるにすぎないのではないか」

あるいは「異なる習慣は我々に異なる自然的原理を与える」といって、自然法則そのものの絶対性には懐疑的であった。だが、近代の自然科学の確立に貢献し、機械論的自然観をとるパスカルは、自然が機械論的に法則にもとづいて動くこと自体は疑っていない。ただ人間は生来原罪を背負ったよわい葦なので、真の自然をつかみ得ないというように考えるのである。[註11] 真空論序文の中で次のようなことをいっている。

「自然の秘密はかくされている。自然はつねに活動しているけれども、人々はつねにその作用を発見しはしない。時間が時代から時代にわたってそれを開示する。自然はそれ自身としてはつねに同じであるが、つねに同じようには知られない。その知識をわれわれに与える実験はたえず増加する。そして実験は自然学の唯一の原理であるから、帰結もそれにともなって増加する。」

「自然をつねに百度でも千度でもいくらでも好きな回数だけながめても十分ではないであろうし、又もしただ一つの場合でも調査せずに残っていたら、そのただ一つが一般的な定義を妨げるのに十分であり、……論証によらずに実験によって証明されるようなすべての問題においては、我々はそれらのあらゆる部分と、あらゆる異った場合とを全部列挙しなければ、普遍的肯定をなしえないからである。」

「無限のためにのみ生み出された人間は動物と同じではない。彼はその生涯の初期においては無知のうちにある。だがたえずみずからを教育して進歩して行く。」

つまり、人間が真の自然をつかむのはむづかしいけれども、実験による証明をくりかえしながら、自然の秘密のヴェールを少しづつかかげて行く努力を無限に続けねばならない、というのである。パスカルは一方でこのように自然の機械論的メカニズムを認め、そのメカニズムを少しづつ明らかにして行く努力を続けて行かねばならぬといいながら、他方で人間の力の及ばなさに絶望し神の恩寵を求めるという二元論になる。

ノヴァーリスは自然が自然法則によって動くことに懐疑的などころか、それは錯覚ではなかろうかといい、法則は便宜的なものであるという。自然に法則を求めるものには自然は法則を与える。求めなければ出て来ないのである。だから法則にしたがっているともいえればいないともいえる。ノヴァーリスにとって自然から一つ一つの法則を導き出す事はどうでもよいことで、むしろ自然あるいは宇宙全体を支配する精神（Seele）をつかみ、全体との連関で一つ一つの現象を考えることの方に意味を見出す。このような Seele をつかむ能力はノヴァーリスによれば「知的直観（intellectuelle Anschauung）」[註12]であるが、これは学者よりも詩人のものであると考えている。

「あらゆる学問（Wissenschaft）は詩（Poesie）になる。」[註13]

「詩人は学者よりもずっとよく自然を理解する。」[註14]

又、「青い花」の中のホーエンツォルレルンの言葉の中に次のようなのがある。

「その時代の事蹟や出来事の記録にたづさわっている少数の人々も、自分の仕事をふかく考えもせず、その観察を完全にし、秩序づけようとはしないで、報告の選択も蒐集も、運任せでやっているのは困ったものです。大多数の歴史家のやり方がそうなのです。……彼等は最も重要なことを忘れているのです。すなわち歴史をして歴史たらしめ、種々の偶然事を連結して、快い、有益な全体とするものを忘れています。こういったすべての事をよく考えてみると、歴史家はどうしても詩人でなければならないように思われます。多くの事件をたくみに結びつける技術をよく心得ているのは詩人だけですから。私は詩人の作る物語や寓話に人生の神秘な生命を感ずる繊細な感情をみとめてひそかに満足の感じを持っていました。詩人の童話には、学術的な年代記よりも、多くの真実がふくまれています。その中の人物や運命は作為であるとしても、作為する精神は真実です。我々は作中の人物の運命のうちに我々自身を感じるものですが、その人達が実際に過去に生存していたかどうかということは、我々を楽しませる上[註15]

にはいわばどうでもよいことなのです。我々は歴史的現象にやどる偉大な単純な精神を直観することを要求しているのです。この願いがみたされれば、その精神の外面的な姿の偶然の存在などは問題にしません。」

自然に対してパスカルは徹頭徹尾科学者であるが、ノヴァーリスは骨の髄まで詩人である。それで、パスカルにおいては自然と人間は二元的に分れるが、ノヴァーリスでは独自の魔術的観念論になっているわけで、そのプロセスをも次第に明らかにして行きたいと思う。「自然法則は習慣の法則である」といって自然法則を一つ一つ見出すことよりも、「現象にやどる偉大な単純な精神を直観する」ことを急務とし、学者は何よりもまず詩人でなければならないという。詩人は勿論ここではいわゆる文学上の詩人というかぎられた意味ではないのであるが、自然はノヴァーリスのいう詩人の生み出す詩という Kunst の対象ということになり、ここで、ノヴァーリスにおける自然 (Natur) と人工 (Kunst) という対立概念が浮び上って来る。

註1　湯浅光朝編「自然科学の名著」毎日新聞社、十七頁。

註2　Novalis in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten Dargestellt von G. Schulz. Rowohlt Taschenbuch Verlag 1969, S. 77f.

註3　Kluckhorn ibid., Band 1. Heinrich von Ofterdingen. S. 243.
小牧健夫訳「青い花」岩波文庫八三頁を参考にする。

註4　Kluckhorn ibid., Band 3. S. 238.

註5　Ebenda, S. 306.

註6　Novalis Werke in einem Band, Campe Klassiker. Hoffman und Campe Verlag 1966. S. 376.

註7　Kluckhorn Band 3 S. 280.

註8　Ebenda, S. 295.

註9　Ebenda, S. 430.

註10　Campe Klassiker S. 376.

註11　学習院大学文学部年報第十六輯十八頁以下。
註12　Kluckhorn Band 3, S. 440.
註13　Campe Klassiker S. 375.
註14　Kluckhorn Band 3, S. 468.
註15　H. v. Ofterdingen, S. 259.　岩波訳一〇七頁以下を参考にする。

第二章　ノヴァーリスにおける自然と人工

第一節　素材としての自然

ノヴァーリスの「対話（Dialogen）」という作品の中に「自然の理論（Die Naturlehre）」と題する節があるが、その中で次のようなことをいっている。

「自然[註1]のほんとうの性質は荒けずりなこと（die Grobheit）にある。自然は全く粗野である。自然を本当に知ろうと思うものは自然を荒くつかまねばならない。……ドイツにおいてのみ自然が本来的に荒けずりであることが見出され、たがやされた。自然が粗野であることは我々の土によくあっている。……自然の定義を下してみると、自然とはあらゆる Grobheit の総括である。そのことから、あらゆる自然法則は、自然が徹頭徹尾荒けずりであって、ますます荒けずりになって行っておわるところを知らないということを引き出して来る。……しかしそれにしても自然がこんなにも絶望的に selten なのはどういうわけであろう。人工（Kunst）は本来的には習慣的なもの（das Gewöhnliche）なのである。……人工（Kunst）の過度に人工的（künstlich）であることのとりこになっているものは人工のもっている荒けずりなところ(Grobheit)を人工のものであると思っているが、それは誤解である。」

ここでいわれている Grobheit というドイツ語を翻訳することはむづかしいが、要するに人工（Kunst）によって扱われる前のなまのかたまり（rohe Masse）の状態のものをいうのであろう。この引用文の意味は以下のようになると思う。自然をつかもうとする場合にはこの生まの状態を生かしてつかまなくてはならない。死物化してしまってはならないのだ。ドイツのロマンティークだけがこのことに気がついた。自然を法則化しようとしても生まを生かすことのむづかしさに直面するであろう。生まの自然といっても純粋なままの自然をみつけることはまれで、習慣化されている自然が多い。Kunst の極致は自然のもつ Grobheit をそのまま生かしているところにある。

この自然についての小論でノヴァーリスの自然のイメージを決定してしまうわけにはいかないが、それにしても Grobheit という言葉は非常に含蓄のある言葉である。それは丁度彫塑家の手ににぎられるのを待っている粘土のようなものではないだろうか。それは完全であるか不完全であるかという以前のただの素材なのである。

だが、ノヴァーリスの他の作品にあたってみると Kunst が腕をふるう対象は彫塑家にとっての粘土のようなものだけではなく、自然はもう少し違ったイメージを提供する。例えば「青い花」の中の主人公ハインリッヒは次のようにいう。

「私[註2]は今までよく色とりどりの自然の成長をみてよろこび、自然の複雑な所有物と親和の関係を結んで楽しみました。しかし今日のように創造的な、純粋な、明朗な感情にみたされたことはありません。あの遠いところが私には近くこの豊かな風景が私には内部の空想のように思われます。表面は不変のようにみえていますが、自然はどんなに変りやすいものでしょう。天使とか不思議な力をもった霊が私のそばにいるときと、悩んでいるものが眼の前でなげいたり、あるいは農夫が天候にめぐまれないとか、苗に雨天がぜひ欲しいとか話しているのを聞かされるときとでは、自然はどんなにちがっていることでしょう。」

ノヴァーリスはここで太陽の恵みをいっぱいに受けた豊かな自然よりも、人々を不幸にする不毛の自然に眼をむける。自然はここで抵抗となって現れる。そして更に同じ「青い花」の中の老坑夫の懐旧談の中で、老坑夫がはじめて地下の坑道におりた時のことを語っているところがあるが、ここはノヴァーリスの気持をそのまま伝えているようで印象深い。ここのところからも彼の自然に対する態度がうかがわれる。

「私[註3]の気持はこの上もなく厳しゅくなものでした。前方のランプはかくれた自然の宝の蔵へ行く道を私に照らす幸福の星のように輝いていました。私達は地下で坑道の迷路に入り込んだのでしたが、親切な私の親方はあきもせずに、私のものずきな問いに答え、また彼の技術を教えてくれました。流水のせせらぎ、人の住む地上からの隔たり、坑道の暗やみと混雑、はたらく坑夫の遠い物音、そういうものが異常に私をよろこばせました。そして私は、むかしから私の何より切な願いであったものを、今こそ完全にわがものとしたことを感じて喜びました。」

坑夫（Bergmann）は光あふれる地上に背を向けてあえて暗やみの地下におりて行く。これは昼間をさけて夜の暗やみを賛美する「夜の讃歌（Hymnen an die Nacht）」の世界にも通じている。地底の暗闇には未知の危険が待ちかまえている。そこで、

「坑夫[註4]はおどろくべき強情な不屈の力を相手としなければならないので、これにうち克つのはただたくましい勤勉とたえまない警戒によるだけです。……坑夫は又幾たびも欺かれやすい導脈にさそわれて方向を誤ることもあるのですが、まもなく道を誤ったことをさとり、無理にも横の方へ穴をこじあけて、ついには鉱石を含有する正しい鉱脈を発見します。」

自然はここでものりこえるのに困難な抵抗となってあらわれる。自然は一種の荒々しさをおびて人間に迫る。だがこういうときこそ人間が技術（Kunst）の力をためすチャンスであり、抵抗が大きければ大きい程人間はますま

す力いっぱいいどんで行かなければならない。老坑夫は更に、

「困難と戦はねばならぬときいつも必要が人間の精神を刺戟して賢い発明をさせる」という。抵抗を排除したときはがい歌をあげる。ノヴァーリスはある断片の中で次のようにいう。

「Kunst[註5] はなまのかたまり (rohe Masse) を克服してがい歌をあげねばならない。訓練 (Übung) が名人を作る。」

こうなってくると自然は素材といっても非常にダイナミックなものになって来る。元来ノヴァーリスの自然は生き生きとして (lebendig)、ダイナミックなものである。ローマン派の人々にとってはしかも暗闇は非常に大切な意味をもつ。光は啓蒙主義を、闇はローマン主義を象徴するといわれる。地底の未知の暗闇の危険にいどんで行く坑夫の姿はまさにローマン主義そのものである。そもそも鉱山の町でもあるフライベルク[註6]はノヴァーリスのみならず多くのローマン派の人々をひきつけてやまないものがあったようである。

ところで「人工がなまのかたまりを克服してがい歌をあげる」といっても、啓蒙主義のように自然を支配しようとするのとも少し違う。抵抗はたえまなくおこり、坑夫 (Bergmann) にシンボライズされた人間はたえず危険にさらされるが、その都度それを克服して行くのである。このようにして自然に対して優位に立とうとする人間の姿は、それにしてもパスカルの場合にはまるでみられなかった。パスカルでは人間は原罪の足かせをはめられたみじめな、誤りに満ちたものであった。そして、自然科学の対象としてではなく、もっと広い意味でみた自然はパスカルにとっては何かよいもの、確実なもの、完全なものであった。それに対して人工は悪しきもの、不確実なもの、不完全なものであり、第二の自然たる習慣は自然のいわば堕落した姿であった。

ところがノヴァーリスの場合はむしろ自然と人工はパスカルとはまるで反対になって、自然の優位は逆転して、

人工の方が優位に立つ。そこには人間の力へのかぎりない自信のようなものがある。習慣についても、断片二九四で、「習慣は出来上って来たしくみである。自然になった人工である」というのも、パスカルのように習慣が自然の堕落した状態と考えられるのではなくて習慣はむしろ人工の堕落した状態と考えられているようである。

但し、ノヴァーリスはしばしば訓練[註7] (Übung) ということをいうが、訓練は習慣の積極的な面である。さきに引用したところ（註5）にも「訓練が名人 (Meister) をつくる」とあった。ノヴァーリスが坑夫の生活を人生のシンボルとして考えていたとすれば、困難な自然に立ち向って征服して行こうとする坑夫には訓練が不可欠のものであるはずであり、「坑夫」と「訓練」を結びつけた時、ノヴァーリスがしばしば訓練の効用をとくのも、「訓練が名人をつくる」というのも理解出来るように思う。

註1　Campe Kl. S. 318.
註2　H.v. Ofterdingen, S. 279.　岩波訳一三九頁。
註3　Ebenda, S. 242.
註4　Ebenda, S. 246.
註5　Kluckhorn Band 2, S. 290. Fragmente 651.
註6　Ricarda Huch; Die Romantik, Rainer Wunderlich Verlag 1951 S. 215.　北通文訳「独逸浪漫派」岩波書店刊行二八二頁。
註7　Kluckhorn Band 3. S. 355.

第二節　二つの自我—内と外

さて、以上によって、ノヴァーリスにおいては自然は人工の扱いを待つ素材 (Stoff) であるというところまで追求したが、更に Kunst についてノヴァーリスが、「一般的草稿 (das allgemeine Brouillon)」の断片七六でい

っていることに注目してみたい。

「哲学[註1]。自我（Ich）の始め（Anfang）は単に観念的である。さもなければもしIchが始まっていたならIchはそう始まらねばならなかったであろう。Anfangはすでによりあとからの概念である。AnfangはIchよりもずっとおくれて出て来る。それ故にIchは始めることが出来なかった。そのことから我々がここでKunstの領域にいることがわかる。しかしこの人工的な（künstlich）想定はいつでも人工的な事実（Factis）から出て来るところの真の学問（Wissenschfat）の基礎である。Ichは構成されるべきである。哲学者は人工的な要素を用意し、つくり出し、そのようにして構築にかかる。Ichの自然史（Naturgeschichte）はこのようなものではない。Ichは自然の所産ではない。自然ではない。歴史的な本質ではない。そうではなくて、人為的なもの（artistisches）である。Kunstである。人為的な作品である。人間の自然の歴史はもう一つの半分である。自我論（Ichlehre）と人間の歴史、あるいはNaturとKunstはより高度の学問において、つまり道徳的な教育論において結合される。そして交互に完全にしあう。NaturとKunstは道徳性（Moralität）によっておたがいに無限に補強しあう。」

この断片の内容も又非常に難解であるが、要するに、「はじめにロゴスありき」ならぬ、「はじめにIchありき」ということである。フィヒテはTathandlungということをいうが、はじめにあるのはIchのTat、つまり、cogitoなのである。これは絶対にNatur（フィヒテ流にいえば）Nicht-Ichではない、Kunstそのものなのである。つまり、Kunstはその根本をIchのcogitoに置いていることになる。それ故ノヴァーリスにおいてKunstとそれに対するNaturの問題を追及して行くにはノヴァーリスがIchについてどんなことをいっているかを先ずあたってみなければならないということになる。

一般的草稿の断片一〇九八で、

「我々のいわゆる自我[註2] (unser sogenanntes Ich) は我々の真の自我 (das wahre Ich) ではなくその反射 (Abglanz) にすぎない」といっている。ここでは「いわゆる自我」というのと「真の自我」というのが対比されていて、前者は後者の反射にすぎないというのであるから後者の方をより高いものとして考えている。これでノヴァーリスは自我の二つの異なった状態、あるいは二つの自我を考えたことがわかる。

二つの異なったものといえばノヴァーリス自身のあり方[註3]自体がいわば一つの矛盾になっている。彼にはローマン派の詩人としての生活の他には生きるための社会生活があった。大学で法律を勉強したあと、製塩所に見習いとして入ったり、ベルクアカデミーに入ったりする前に、テンシュテットにおいて地方官ユストの下で行政事務の見習いをしているが、[註4]そのユストはノヴァーリスが行政官僚として非常に有能であったことをつげている。彼は役人生活を志し、死ぬ前年の一八〇〇年の四月にテューリンゲン地方官を希望し、十二月その地位を約束されたが胸部疾患が悪化し、翌年早々死んでいる。つまり、彼の詩人としての生活は内側の生活であり、役人としての社会生活は外側の生活である。このような分裂は彼においては先ず自我の分裂から始まり、身体 (Körper) と精神 (Seele)、自然と人工といった対立になって行く。[註5]ノヴァーリスは「我々は同時に自然の内と外にいる (Wir sind zugleich in und außer der Natur.) (断片七五)」というが、彼におけるこれらの対立は「内 (das Innere)」と「外 (das Äußere)」の対立である。ある断片では次のようにもいっている。

「我々[註6]は感官の二つの体系をもっている。この二つは異なったものとして現はれるが、しかし最も密接に織合されている。一つの体系は身体とよばれ、他は心といわれる。前者は外部の刺戟——それを我々は自然又は外界 (die äußere Welt) と名づける——に従属し、後者は本来内部の刺戟——我々はそれを精神又は精神界 (die Geisterwelt) と呼ぶ——に従う。」

このような外部と内部の分裂はそのまま自我にも内的な自我と外的な自我の二つの分裂をひきおこす。したがってさきほどの「真の自我」というのは内的な自我に、「我々のいわゆる自我」というのは外的な自我に対応する。ローマン主義においては一般に対立するものの克服が関心事であって、フィヒテの批判的観念論はさしづめそれを代表することになるのであろうが、[註7]分裂とその結合（Synthese）は一般にこの時代を支配する思想の傾向であったようである。このような分裂はノヴァーリスにおいては又、ローマン化（Romantisierung）というようにいわれている。

「[註8]世界はローマン化されなければならない。そのようにして根源的な意味が再発見される。ローマン化は質的な分極（qualitative Potenzierung）以外の何者でもない。低い自己（das niedre Selbst）はこのような操作においては、よりよい自己（das bessere Selbst）と同一視される。そのかぎりでは我々自身がそのような質的な分極線（qualitative Potenzenreihe）である。」

世界を質的に分裂させることによって根源的な意味が再発見される。自我もそうである。「より高い自己」は「内的な自我」に、「より低い自己」は「外的な自我」に対応するが、この同じ断片で更に続けていう。

「このような操作はまだ完全には知られていない。ローマン化の操作の際に私は日常的なもの（das Gemeine）により高い意味を、習慣的なもの（das Gewöhnliche）に秘密めかした外見を、すでに知られているものに未知のものの価値を、有限のものに無限の現象を対比するという仕方でローマン化する。」

ここのところからノヴァーリスのロマンティズィーレンには、日常的なものとより高いもの、習慣的なものと秘密めかした外見、という対立の組合わせも加わって来る。本稿のはじめのところに引用した断片三四七や三五二に、習慣的なもの、日常的なものが散文（Prosa）であって、歌（Gesang）ではないといっているし、断片二九四

のおわりのところで、習慣から生じた自然は unrythmisch である、リズムがないといっている。Gesang あるいはリズミカルなものと詩（Gedicht）とを同じものと考えてよいとすれば、ここで又散文と詩というポテンツィールンクも出来上って来るが、詩や歌やリズムは内的なものを表現するのに適し、習慣的な日常生活は歌や詩にならぬ、文字通り「散文的」なものだというのである。

又一七九八年四月、ローマン派の機関紙「アテーネウム」の第一輯に発表された「花粉」（Blütenstaub）と題する断片の中でやはり日常生活や習慣について次のようにいっている。

「我々の日常生活は単なる現状維持的な、つねにくり返している仕事から成っている。習慣のこの循環は生存の雑多なあり方が混り合っている、我々の地上の生活一般という主な手段のための単なる手段にすぎない。俗物（Philister）は単に日常生活のみを生きる。主な手段は彼等の唯一の目的であるように思われる。彼等はすべてのことを現世的な生活のためにする。」[註9]

ここでノヴァーリスは日常性や習慣を俗物の通弊として軽べつ的でさえある口調できめつけている。ノヴァーリス自身にも有能な官僚たらんとする積極的な社会生活があったのであるが、ここには「俗物」であるまいとする非常に潔べきな気持がほとばしり出ている。我々の生活は種々雑多な習慣の複合であるが、このことに気がつくと日常的な習慣は抵抗となり始める。ノヴァーリスの場合にははっきり習慣を抵抗と感じている。このことを抵抗と感じないものには自我の分裂はおこらず、習慣をそのまま受入れて現世的な生活のための手段として生きることが出来る。習慣に抵抗を感じ、習慣がいわば「障害（Anstoß）」となるとき自我の内面化がおこって来るということになりはしないであろうか。この「障害」にまけてしまってはならないのである。それを克服して行かねばならない。自我が日常的な習慣の中に埋没しているうちは「より低い」のであり、「真の自我」ではないのである。

註1　Kluckhorn Band 3, S. 253.
註2　Ebenda, S. 469.
註3　Novalis (ro ro ro) S. 96.
註4　R. Huch ibid., S. 64f.　北訳、七六頁。
註5　Kluckhorn Band 3, S. 252.
註6　Ebenda 2, S. 546.
註7　Novalis (ro ro ro), S. 97.
註8　Kluckhorn 2 S. 545.
註9　Campe Kl. S. 339.

第三節　自己認識――マギー

前節のおわりで、習慣のような外面的なものが抵抗となり始めるのは、我々が習慣にとりまかれていることに気づくときだというようにノヴァーリスの断片の内容を読みこんでみたのであるが、その気づくということは反省するということである。フィヒテにとって自己の本質は反省であったが、ノヴァーリスでも同じことであろう。ノヴァーリスは「我々は我々自身を理解するとき世界を理解するであろう」という。自己の内にかえって自己自身を知るということ、自己認識（Selbsterkenntnis）というさなぎの中にいったん身をひそめてはじめて蝶になって自由に飛びまわれるようになる。「自己認識」については先ず一七九八年一月に書かれた「ザイスの学徒（Die Lehrlinge zu Sais)」の中のヒヤシンスとバラの挿話の意味を考えることから始めたいと思う。このメールヘンはノヴァーリスのすべてが結晶された美しいものであるが、筋をひとくちでいってしまえば、すべてのもののもとになるものをさがし求めたヒヤシンスがついにたづねあてたものは結局自分自身だったという話である。

美青年ヒャシンス（Hyazinth）は美しい自然にとりまかれた楽園で両親としあわせにくらしていた。美少女のバラ（Rosenblütchen）とも相愛の仲だった。ヒャシンスには木や草花や鳥やけもの達や岩山の話す言葉がわかって彼等といつも話をして過した。ところがある日遠い国々を旅してまわっている白髪の老人が彼の家にとどまって、ヒャシンスのみたこともきいたこともない異国の様々のことを話してきかせ、好奇心の強い彼はすっかりそのことに魂をうばわれてしまい、老人が去ってからはすっかり人がかわったように憂うつに沈む人になってしまった。老人はその上去る時に誰にも内容のわからない、一冊の小さな書物を残して行ったのである。ヒャシンスのそんな様子にまわりのものも悲しまねばならなかった。森の老女は心配してその本を火の中に投げ入れてもやしてしまい、彼が又すっかり元気になるように旅に出ることをすすめる。彼は両親に別れをつげて長い旅に出るが、その時に両親にいう。「私は自分でもどこに行くのかよくわからない。とにかく、事物の母、ヴェールをつけた若い女の人が住んでいるところに、私の情緒に火をともしてくれるようなものを求めて（dahin, wo die Mutter der Dinge wohnt, die verschleierte Jungfrau. Nach der ist mein Gemüt entzündet）行く」という。

彼の旅は永い間続く。彼はあらゆるところをたずねてまわるが、彼にはもう以前のように木や花やけもの達の話がわからなくなっている。だがある日、きいたことのある言葉に耳をそばだてる。泉と花々が上の方から谷におりて来る。そこで彼はイシスの女神の神殿はどこかたづねると、この上の方にどんどんのぼって行きなさいという。その教えにしたがった彼はついにめざす神殿をたづねあて、高なる胸をおさえつつ女神のヴェールをかかげた時彼の腕にたおれかかって来たのは美少女のバラだった。

この話ではさがしあてたものはバラだったことになっているが、「ザイスの学徒」にはあとがきがいくつかついている版があるが、その一つに次のような二行詩がある。

「[註1]とうとうたづねあてて彼はザイスの女神のヴェールをかかげる。だが彼のみたものは何か、彼はみた――不思議の不思議、自分自身を（Er sah — Wnder des Wunders, sich selbst）。」

彼がさがしあてたものは、万有の母たる彼自身、しかも彼自身の情緒ともいうべきものであったのだ。それはバラによって象徴されたバラへの愛（Liebe）とバラによって愛されるという関係になる、「愛情でみたされた自分自身」であったのである。向うから、つまり外側から愛され、こちら側から、内側から愛するという愛[註2]の一致（liebende Vereinigung）が自己認識と自己充足（Selbsterfüllung）の最高の段階である。フィヒテの自我はしゃにむに無限をめざして義務を実践するために非我の定立する障害（Anstoß）とたたかうのであるが、ノヴァーリスの場合には愛情をもって相手に働きかけ、相手も愛情をもってこちらに向って働きかけて来る。

このヒヤシンスとバラの話の中の自然の描写は、「青い花」の鉱山の中とちがって、読んでいて桃源境の暖かな常春の陽光がじかに伝わって来るかのような、非常に美しいものである。純真なヒヤシンスは自然と会話が出来る程自然に全くとけこんでいる。ノヴァーリスは子供の心を高く評価するが、老人に会う前のヒヤシンスは自然児だったのである。だが一巻の書物に象徴される認識の欲望が植えつけられるや、自然とはなれて自然がよくわからなくなってしまう。ここは非常に興味深い。悟性的、分析的なアプローチの仕方では自然をつかむことが出来ないという従来の学問への批判もこんな形で表現されているとも考えられる。自然とはなれてしまったヒヤシンスの心は「緑色でぬりつぶされ、つめたく沈黙したものでうづめられ、一方あこがれはつのるばかり、時はす早く過ぎ去って行くばかり」である。そういう精神的なさまよいをしばらく経験したあとでついにたづねあてる時が来る。その時に道を教えるものに「水晶のように澄み切った泉（kristallner Quell）」があるが、これも象徴的である。これは「青い花」の中にある「原水[註3]（Urgewässer）」とは無関係であろうか。

ヒヤシンスは情緒（Gemüt）に満たされた自分自身をとりもどして再び平和な生活にたちかえる。バラを愛し、書物を火の中に投じてくれた老女に感謝しつつ、両親や孫達と共に末永くしあわせな生活をおくる。いったんたづね求めたものを得るや守勢のさまよいの生活転じて積極的に外に向って愛をもって働きかける。つまり今度はこちらから自然にとけこもうとする。この話には Liebe とか Gemüt とかの要素も加わって、「青い花」の中の鉱夫の、生命の危険にさらされた自然との対決といった深刻な自然との葛藤といった面とは又別に、ノヴァーリスのユニークな自然観をうかがうことが出来る。

次に引用する詩は、やはり「自分自身を知ること」がテーマになっていて、彼のいわゆる魔術的観念論（magischer Idealismus）に発展しているものである。それは、一七九八年五月十一日フライベルクでつくられた、「汝自身を知れ（kenne dich selbst）」という詩である。[註4]

「あらゆる時代を通じて人が求めたものはただ一つ。
世界の高いところ、あるいは低いところのいたるところで、
さまざまな名のもとに――むだに――それはいつもかくされていて、
人はそれを感じはしたがつかまえることをしなかった。
子供達にこころよい神話の中で、かくされたもののある城への道と鍵とを示した人はもうとっくに現れた。
ほとんどの人々が解決のやさしい暗号を理解しなかったし、ほとんどの人が又目的に達しなかった。
永い年月が流れた。――あやまちが我々の感覚をとぎすまして、神話それ自体はもはや真理をかくしていないことに気づく。
分別をわきまえて、世界をもはやとくと考えこまない人はしあわせである。

永遠の真理の石を自分自身で求める人はしあわせである。
理性的な人だけが真の錬金術師（Adept）である。——
彼はあらゆるものを生（Leben）と金（Gold）にかえる。エリキジール剤（Elixiere）はもはや使わない。
彼の中で聖なるフラスコは湯気をたてる——王は彼の中にいる——デルフォスも又。
そして彼はついにそれをつかむ——汝自身を知れ（kenne dich selbst）ということを。」

この詩を理解する鍵はさきほどの「ザイスの学徒」のあとがきの二行詩なのである。ここでもやはり人はただ一つのものをさがし求める。ノヴァーリスでは人はいつも「ウィルヘルム・マイスター」のように遍歴してさがし求めている。wandelnすることはローマン主義の一つの特徴といってよい。「青い花」の主人公ハインリッヒは「青い花」を求めてさがしまわるし、ヒヤシンスのたずねもとめたものも同じである。「青い花」の鉱山の坑夫にしても鉱脈をさがしあてるために苦労している。

次に神話（Mythos）の中に真理はない、というが、ノヴァーリスは神話[註5]と錬金術（Alchimie）に親近性をみとめているという。錬金術とはフラスコの中でエリキジール剤を媒介としてあるものを金にかえる術であるが、十八世紀のおわりにラヴォアジェ[註6]によって初めて新しい元素観が確立され、燃焼の理論が明らかになり、中世の錬金術の伝統的思想は根本からくつがえされることになった。つまり錬金術は神話にすぎないことがはっきりしたのである。しかしノヴァーリスはフライベルク時代に錬金術書の研究にこったことがあって、錬金術をヒントにして独自の魔術的観念論を仕立てあげる。彼にとっては自己認識（Selbsterkenntnis）が世界をかえるエリキジール剤なのである。

更に「理性的な人間（der vernünftige Mensch）」のみが真の錬金術師（つまり魔術師）であるという時の Ver-

nunftであるが、フィヒテの場合を考え合わせてみると、フィヒテの理論的自我の最後の段階に出て来る理性は、一切の客観を捨象して客観から自由になる能力であった。ノヴァーリスの魔術も先ず第一に自己の外にある客観にひきずりまわされることなく、それから出来るかぎり自由になることなのである。我々は我々自身のすみずみにまで眼光を行きとどかせることの出来る時に、我々自身を、つまり世界を理解する道もひらけてくるわけである。

マギーについてノヴァーリスは次のようにいっている。

「魔術[註7]は感覚の世界(die Sinnenwelt)を自由に使う技術(Kunst)である。」

又、身体と精神の二つの世界があることを説いたあとでは、

「この二つの世界、従って二つの体系は自由な調和(Harmonie)をなすべきであり、不調和(Disharmonie)あるいは単調(Monotonie)となるべきではない。単調から調和への移行はもとより不調和を通じて行われ、——最後にはじめて調和が生まれるであろう。魔術の時代では身体は心、あるいは精神界に仕えるのである。」

自分自身を知ること、自分自身のすみずみにまで眼光をゆきとどかせることは「真の自我」、「より高い自我」をうることである。真の自我をつかんで「我々のいわゆる自我」、「より低い自我」から自由になって、それに向って働きかけることの出来るものが魔術師である。魔術を使うものは感覚の世界を自由にあやつることが出来、自分自身の外面的感覚の部分や身体的な条件におぼれてしまうことなく逆に支配することができる。

したがって魔術は決して特別なものではない。彼が「天才(Genie)」といっているのはこの魔術の駆使出来るもののことであるが、一般的草稿の六三では次のようにいっている。

「人格論[註8]。真に綜合的な人(eine ächtsynthetische Person)つまり天才は、多くの人々に共通である。あらゆる人は天才の萌芽である。」

つまりあらゆる人は天才になる可能性をもっており、したがってすべての人は魔術を使う可能性を持っている。

ところで、今の引用の文の中に synthetisch という表現があるが、ノヴァーリスもフィヒテの影響からか、自我の内部の動きを始め、彼における二つの世界の動きを弁証法的にとらえようとする傾向もある。前述の魔術についての引用文中の「二つの体系は自由な調和をなすべきであり、……単調から調和への移行はもとより不調和を通じて行われ、最後にはじめて調和が生まれるであろう」というところも二つの間を弁証法的に考え、魔術は結局綜合(Synthese) を行うものであるというように考えられている。

又、Synthese にはノヴァーリス独自の考え方がからむ。彼は綜合ということを、ほのお (Flamme) をイメージに描いて考えている。

「我々の自我について。——精神 (Seele) における身体 (Körper) のほのおとして。精神の酸素との類似性。あらゆる綜合はほのおであり、火花 (Funken) である（断片八九七）。」[註9]

こういうところをみるとまだ錬金術との縁が切れていない感じになる。当時は酸素も発見されて燃焼の理論も確立されたところであって、このことには、ガルバニ電気に示したと同じ位の関心をふりむけている。ノヴァーリスは燃焼[註10]という現象を哲学的にシンボリックに使ったのである。ほのおについて、「ほのおは分解されたもの (das Getrennte) を結合し、結合されたもの (das Verbundene) を分解する」ともいっているが、ほのおの中で彼の両極、つまり固体と液体、空間と時間、自然と人工等の外的なものと内的なものは結合される。自我は「精神(Seele) における身体 (Körper) のほのお」であり、両者の綜合なのである。

「自然法則は習慣の法則である」、「自然の不変の法則はあるといえばあるし、ないといえばない」といい切って不変の法則を分析的に導き出すことよりもむしろ、全体との連関の上に立って自然を連鎖的にとらえることを急

務として建設されようとした彼の百科全書学なるものも結局魔術師の手にゆだねられることになる。やはり「一般的草稿」の中に次のような断片がある。

「自然の魔術師[註11] (der physische Magus) は自然に生命を吹きこみ (beleben)、そして彼の身体を扱うように自由に自然を扱うことを知っている。(三二三)」

「魔術[註12]は哲学とは全くちがっていて、世界を、学問を、芸術をそれ自体で (für sich) つくりあげる。魔術は天文学、文法、哲学、宗教、化学等々。(一三七)」

ノヴァーリスは自然を把握するのに悟性的に分析してしまう学者よりも全体との連関で直観的につかむ詩人の方がすぐれているといったが、その詩人は先ず魔術的な自我にめざめていなければならない。

ただ魔術というときに、錬金術との関係ばかりでなく、ゾロアスター、ユダヤ教のカバラ等東方の神秘主義を背景にした、新プラトン主義の流出論 (Emanationslehre) などの神秘主義的汎神論の影響もあることをここでつけ加えておかねばならない。さらに引用した断片一三七のほかの部分でノヴァーリスは次のようにいう。

「魔術。(神秘的文法)。記すものの記されたものとの共感 (Sympathie)。(カバラ主義 ((Kabbalistik)) の根本理念の一つ。)……宇宙を変化させる理論 (Wechselrepräsentationslehre des Universums)。流出論。(人格化された流出)。魔術においては精霊 (Geister) が仕える。静観的な生活。プラトンはゾロアスターの魔術を神々の召使いとよぶ。……」

神秘主義といえば、ノヴァーリス自身、ヘルンフート派 (Hernhuter) のピエティスムスの環境の中で育ち、死ぬ間際まで、創立者ツィンツェンドルフの書いたものをよんでいたという。

ところで、ノヴァーリスの目指したことは単に魔術を駆使してより高い自我が、より低い自我に、あるいは自

然、身体など外的なるものに君臨することばかりではない。むしろ彼の目指したことは両者の調和（Harmonie）なのである。そこで本論第二章自然と人工の問題も最後にその両者の調和がどのように考えられているかについての断片にあたってみなければならない。

註1　Campe Klassiker S. 131.
註2　Novalis (ro ro ro) S. 98.
註3　Urgewässer（原水）。ノヴァーリスはヴェルナーの岩石水成説の影響からか、原水というものを想像する。それは水を万有の太源と考え、かつ我々が見るすべての液体の源である根本現象であると考える。我々の感ずるあらゆる快感は我々のうちの原水の動揺から生ずる。
註4　Beck's kommentierte Klassiker, Novalis Werke, Herausgegeben und kommentiert von Gerhart Schulz, Verlag C.H. Beck München, S. 33.
註5　Novails (ro ro ro), S. 97.
註6　ラヴォアジェの「化学要論」はフランス革命の年（一七八九年）に出る。
註7　Kluckhorn Band 2, S. 546 Fragmente 109.
註8　Ebenda Band 3, S. 250.
註9　Ebenda, S. 440.
註10　Beck's, S. 778.
註11　Kluckhorn Band 3, S. 297.
註12　Ebenda, S. 266. なお、本節で扱ったマギーの問題については、久野昭「魔術的観念論の研究」理想社、がすぐれている。

第四節　調和——愛

最後にノヴァーリスの考えた「調和（Harmonie）」がどんなものであったかを浮き彫りにするためには、拙稿第二章「自然と人工」の第二節の始めに引用した一般的草稿の断片七六をもう一度登場させねばならない。断片七六

の前半では、自我（das Ich）は人工（Kunst）の中核になっていて、自然とは全くちがったものであるといっているが、そのおわりの部分が問題である。

「自然と人工は、より高度の学問において――道徳的な教育論（moralische Bildungslehre）において結合され、そして交互に完全にしあう。自然と人工とは道徳性（Moralität）によって互いに無限をめざして（ins unendliche）補強される（armiert）。」

この中の moralisch とか Moralität をノヴァーリスはどのように考えているのであろうか。一般的草稿の中の次のようないくつかの断片が手がかりになるであろう。

「未来論[註1]（Zukunftslehre）。天地創成論（Cosmogogik）。自然は道徳的（moralisch）であるだろう。もし自然が Kunst への真の愛（Liebe）から、――つまり Kusnt に向って自分の身を投げ出す（sich hingeben）――Kunst が欲することをするならば。一方 Kunst はもしそれが自然への真の愛から――つまり自然のために生き、自然にしたがって働くならば道徳的になるだろう。両者はそれを同時に自分のために、自分のこのみで他者のために他者のこのみで行なわねばならない。それらは自己の中で他者と、他者の中で自己と出あわねばならない。我々の知性と我々の世界とが調和する（harmonisieren）とき我々は神にひとしくなる――（断片七八）」

「神[註2]と自然はここで区別せねばならない。神は自然をもって何ものも創造しない。神は自然の目的である。自然が他日それと調和すべきものである。自然は道徳的になるべきである。そうなるとカントの道徳神と道徳性は全く違う光の中に現れるであろう。道徳的な神は魔術的な神よりもはるかにより高い（断片六〇）。」

「神智学[註3]（Theosophie）。我々は正しく道徳的であるためには、魔術師であろうとせねばならない。道徳的であればある程それだけ神と調和し、神的になり、神と結びつく。道徳的な感覚によってのみ神は我々に明瞭になる。

道徳的な感覚（der moralische Sinn）とは存在の感覚であり、それは外部的な感情の動きのないものである。つまり、結合（Bund）に対する、最高のものに対する感覚である。……さて私は天に神や宇宙霊（Weltseele）を置こうとしているのであろうか。私が天を道徳的な宇宙であるといい、そして宇宙の中に Weltseele を置けば一番いいのだろう（断片六一）」

自然と人工の両方からおたがいへの愛をもって自分の身を投げ出し、夫々が相手にしたがって生きるとき両者の調和が生まれ、それが道徳的ということになり、道徳的であればある程神に近づく。道徳的な感覚とは最高の存在への感覚のことで、このとき神が明瞭になる。最高の存在とはハインリッヒの求めた「青い花」であり、ヒャシンスが探ねまわったヴェールをとったイシスの女神の本体である。それは宇宙を支配する何か情緒（Gemüt）のようなもの、宇宙の霊（Weltseele）である。

このような最高の存在の感覚をもつための前段階として我々は魔術的でなければならなかった。魔術は調和への一つの階段（Stufe）なのである。魔術の段階で人は、外的なものの中にいわばおぼれている、自我のより低い状態を反省して外的なものから自由になって自我のより高い状態に達する。より高い自我は外面にとらわれず、こちらから自由に外にあるものを変えることが出来る。そして更に外にあるものに対して愛が生じて来るとき、つまり、相手のために自分を投げ出そうとするとき、そして相手もこちらに向って自分を投げ出そうとするとき、両者の調和が生まれる。但しその際、調和はあくまで調和であって自己をなくして相手に没入し去ることではない。あくまで両者は最後まで自分をなくさずのこしている。ノヴァーリスは、「それらは自己の中で他者と、他者の中で自己と出あわねばならない」というが、自然が自分を投げ出して来るというのも要するに、人間が自然に向って自分を投げ出そうとする姿を鏡に映したものではないであろうか。結局はそれは自己内部での出来事なのである。向うか

ら愛されるということは自分の方から愛するということである。フィヒテがそのプロセスを厳密に追った自我と非我の関係もすべて非我は自我の影になった半分（dunkle Hälfte）なのである（リカルダ・フーフ）。その意味ではノヴァーリスの場合も調和といっても結局自我が最後までのこっている。そう考えてみると、ノヴァーリスが自我と非我についていっていることもうなづけるのである。

「何かあるものは表現（Repräsentation）によってのみ明瞭になる。人はある事柄が表現されているのをみるときにもっとも容易に理解する。したがって人は自我が非我によって表現される場合においてのみ自我を理解する。非我は自我の象徴（Symbol）であって、自我の自己理解（Selbstverständnis）の役に立つ。又逆に人は非我を、それが自我によって表現されている場合においてのみ理解し、そして自我は非我の象徴である……（断片四九）。」[註4]

ノヴァーリスにとって自然は lebendig なものであると同時に、（自然と lebendig なものは一つである――断片五〇）人工の手の加わるのを待つ荒けづりな（grob）、なまのかたまり（rohe Masse）でもある。だから調和によって自然と同感するあるいは自然と一体になるといっても、イニシァティブをとるのは人工の方である。次にあげる断片でそのことはいよいよはっきりする。

「自然の自然化（Naturation der Natur）が芸術作品（Kunstwerke）である。芸術作品は芸術的な自然（künstliche Natur）から出て来る（断片五八七）。」[註6]

「人工は補足的な自然（complementarische Natur）である（断片五八三）。」[註7]

ここで complementarisch というのは、補うという意味であろうと思う。自然らしさを出すために自然を生かすために人工の方から補ってやるというようなことであろう。

更に断片五二は人間と自然の関係における人間の優位に決定的にとどめをさす。

「人間は自然の救い主（Messias der Natur）である（断片五二）。」[註9]

自然は人間によってはじめて自然になる。人間は自然の福音（Evangelium）である。しかも人間は自然の教育者であるともいっている。

「自然の教育論（Bildungslehre der Natur）。自然は道徳的になるべきである。我々はその教育者（Erzieher）である（断片七三）。」[註9]

すでに引用した断片七八のおわりのところに、「我々の知性と我々の世界とが調和するとき、我々は神にひとしくなる」といっているのであるが、その調和する時の状態を伝えているのは断片八九六であろう。

「エクスターゼ。内的な光の現象（innres Lichtphänomen）＝知的直観（intellektueller Anschauung）（断片八九六）」[註10]

つまり知的直観によるエクスターゼの状態である。内的な光の現象といっているものは、ほのお（Flamme）とか火花（Funken）と同じものであろう。すでに前の節でふれたように断片八九六の次の断片八九七で、「あらゆる綜合はほのおであり、火花である」といっている。

以上によって第三節のはじめに引用した断片七六の意味も明らかになると思う。道徳性（Moralität）といってもカントやフィヒテのような意味ではなしに、「自然の道徳化（Moralisierung der Natur）という考え方はオランダのヘムスターホイスを発展させたものである。[註11] 道徳性といってもフィヒテのように義務の実現という意味でなしに、相手との調和という意味になる。ただ、自然と人工が「たがいに無限をめざして」完全にしようとノヴァーリスが断片七六のおわりでいっているところは、フィヒテの実践的自我をおもいださせる。[註12] フィヒテの実践的自我（praktisches Ich）は絶対的自我（absolutes Ich）を理念としてもって無限に向って努力する（streben）ものであ

る。

したがってノヴァーリスの場合にも自然と人工の両者は、より完全な調和をとるために不断の努力をおしんではならないことになる。この点についてすぐ念頭に浮かぶのは、すでに引用した、「人工はなまのかたまりを克服してがい歌をあげなければならない。訓練が名人をつくる（Übung macht den Meister）」という断片である。Übung は Strebung（努力）の別の姿である。Übung は又 Gewohnheit（習慣）を積極的につくり出そうとする努力にほかならない。勿論習慣といっても、内面的な自我の障害 Anstoß になるような消極的なものではなく、Harmonie に積極的に貢献するはずのものである。但しノヴァーリスには調和と訓練とを関連づけている断片は見当らないけれども、訓練に相当の関心をはらっていることはたしかである。

註1　Kluckhorn Band 3, S. 253.
註2　Ebenda, S. 250.
註3　Ebenda, S. 250.
註4　Ebenda, S. 246.
註5　Ebenda, S. 246 f.
註6　Ebenda, S. 368.
註7　Ebenda, S. 368.
註8　Ebenda, S. 248.
註9　Ebenda, S. 252.
註10　Ebenda, S. 440.
註11　Beck's, S. 726.
註12　本稿のフィヒテの記述については、J. G. Fichte— Gesamtausgabe 1, 2, Friedrich Frommann Verlag Grundlage der gesammten Wissenschaftslehre als Handschrift für seine Zuhörer 及び、九鬼周造著「西洋近世哲学史稿」下

岩波書店、一七一頁以下を参考にした。

あとがき

ノヴァーリスにおいては内的なものと、外的なものに分離されていて、その二つのものの綜合が目標となっていること、及び、人間が自然の教育者であり、メシアであるということで、自然が人間に対して優位にあることを考え合わせると、本稿の序文で引用して以来幾度となく引き合いに出して来た、一般的草稿の断片二九四の一つ一つの事柄の理解はもはや容易である。自然はノヴァーリスの二つの世界の体系の外的なものに、人工は内的なものに、習慣は外的なものに属することになる。ノヴァーリスにおいて Kunst というのは自我の一切の行為を含んでいる。Kunst において何かある同じことの反復がおこるとそれは習慣となって自然の体系の方にくみこまれて行く。パスカルは、習慣には自動作用があって、これが心理的にいちいち影響を与えることをくり返しいろいろの形で示したが、ノヴァーリスのような自我の分裂はいまだおこらず、習慣や自然の問題が自我の内と外から説明されることはなかった。逆にノヴァーリスでは Kunst からはなれて自然にくみこまれて行った習慣が逆に人間の自然認識に心理的に影響を及ぼして行くことにはごくおおざっぱな説明を与えているだけである。ここはフランス哲学とドイツ哲学の差でもあろう。Kunst からはなれて出来上った「自然」はつまりは第二の自然であって、「不器用な、不完全な、非法則的な[註1]、リズミカルでない自然」であるとノヴァーリスはいう。それでは逆に、完全な、リズミカルな自然が、つまり第二の自然ならぬ第一の自然があるのかというと、パスカルの場合には自然（機械論的自然ではなくもっと広い意味の自然）はたしかに完全なもの、よきものだという前提の上に立っているが、ノヴァー

リスの場合には自然は、人間との調和によって始めて完全にも、リズミカルにもなり得るものとして考えられる。習慣ではない、純粋な自然は grob な、roh なものであって、彫塑師がこれから手をつけようとする粘土のようなもので、それ自体では完全なものでもリズミカルなものでもない。自然にリズムを与え、より完全なものにして行くのは人間、しかも芸術的な創造的な自我ということになる。パスカルでは、自然は神を模倣していて、それ自体でよきもの、完全なものであり、原罪を背負っている、みじめな有限な存在である人間はそれに近づくことはむづかしい。自然科学的にも、実験的証明によって帰納的に時間をかけて完全な自然認識に近づいて行くことしか期待出来ない。人間が完全なものに合致する道は別にある。それは神の信仰によって神の恩寵を得ることである。

ノヴァーリスにおける神は、人間と自然との調和によって得られる。自然に向って働きかける、魔術的な、創造的な自我が、最高のものの感覚、つまり宇宙を支配する情緒（Gemüt）、宇宙の霊（Weltseele）を直観するとき、神が明瞭になって来る。自然の法則の理解も、このような直観にもとづいてなされないと、単なる習慣の法則としての法則を得るだけのことになってしまう。したがって、ノヴァーリスの自然法則の導出はどちらかというと演繹的であるといえる。

しかし、ノヴァーリスにおいて、外的なものの体系にくり入れられ、内的な自我の、いわば障害となり、内的な自我には消極的な意味しかもたない習慣も、「訓練」となると又違った意味をもって来る。訓練にはノヴァーリスは積極的な意味を与えている。パスカルにしても、習慣は真の自然把握から人間を遠ざけてしまうけれども、習慣のもつ自動作用を、信仰をかためるために利用しようとしている。つまり、パスカルにおいても、ノヴァーリスにおいても、習慣は理論的には消極的な役目しか果さないが、実践的には建設的な、積極的な意味をもって来る点では共通している。

註1　ここで ungesetzmäßige Natur といわれていることは矛盾を含んでいる。ノヴァーリスによれば、習慣は自然であり、自然の法則は、習慣の法則である。したがって習慣が自然法則をつくるのである。つまり、およそ法則というものには、習慣が関与しているのである。その習慣自体のことを ungesetzmäßig であるといっているのは明らかに矛盾であると思われる。習慣は法則化する能力は持っていても、習慣それ自体は非法則的であるというのであろうか。ここのところは非常に難解である。